港区探訪

はじめて物語⑦「鉄道」

バックナンバー

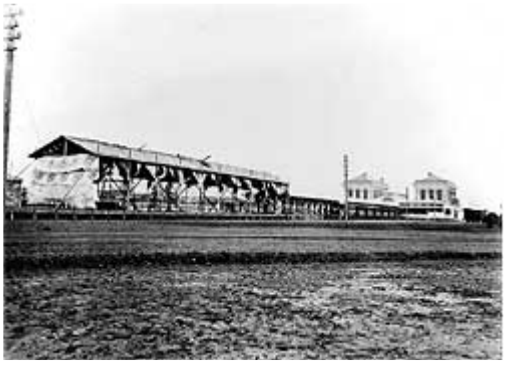
港区で発祥した物や事柄を紹介するシリーズ第7回目。テーマは「鉄道」です。明治の近代化に大きな役割を果たした鉄道。
今回は汐留の「旧新橋停車場」を訪れて開業当初の鉄道と駅の面影をたどっていきます。

新橋・横浜間で鉄道開通

明治3年、汐留に鉄道敷設の測量の起点となる杭が打ち込まれ、新橋・横浜間の鉄道工事が始まりました。

当時は国内に鉄道技術がなかったため、大勢の外国人技師が工事に携わりました。技師長のイギリス人、エドモンド・モレル氏は、高価な鉄製枕木を外国から輸入する代わりに国産の木材で枕木を作ることや、日本人技師を育成する学校の必要性を説くなど、貴重な提言をし、日本独自の鉄道事業運営に貢献しました。

明治4年には品川・横浜間の設備が整い、この区間で試運転がはじまります。翌年6月（太陽暦）には同区間で仮開業。そして10月14日、新橋から横浜に向かう最初の列車が出発し、ついに日本の鉄道が開業したのです。



▲開業直前の新橋停車場　明治5年／港区立港郷土資料館所蔵

開業当初の新橋駅

鉄道開業当初の新橋停車場は現在の汐留にありました。汐留が選ばれた理由は、築地の外国人居留地に近く、また当時の貨物輸送の要だった水運との連絡が取りやすいなど、好条件が重なっていたからだといわれています。
停車場の駅舎はアメリカ人のR・P・ブリジェンス氏によって設計された木骨石張り二階建ての西洋風建築で、まさに文明開化のシンボルといえるものでした。

新橋では鉄道の開通とともに乗合馬車やガス街灯などによって道路交通も発展し、これらは商業にも大きな影響を与えます。旧幕府の武家に依存した商家は姿を消し、代わりに駅を行き交う人々を相手にする商店街商業がはじまったのです。駅周辺には旅館、飲食店、運送店などが立ち並び、さらに人力車、洋傘、洋杖、洋馬具などを製造・販売する店も登場し、当時の先端をゆく商業地として賑わいを見せました。

▲旧新橋停車場　明治20年ごろ／港区立港郷土資料館所蔵

▲「旧新橋停車場」のプラットホーム側。柱の位置は開業当時と同じです。

汐留再開発と旧新橋停車場

大正3年、東京駅の開業に伴い「新橋」の駅名は烏森駅が引き継ぎ、かつての新橋駅は貨物専用の「汐留駅」として再出発しました。その後、大正12年の関東大震災で長らく親しまれてきた旧駅舎は焼失。そして昭和61年には汐留駅も使命を終えて廃止されることとなります。

平成3年、汐留の再開発工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査の際に、かつての新橋停車場の駅舎やプラットホームの礎石などが発掘され、遺構の一部は国の史跡に指定されました。これらを目に見える形で後世に伝えたいという願いから平成15年に誕生したのが「旧新橋停車場」です。これは現存する明治期の写真などの資料と、発掘された遺構を基に、明治時代の駅舎と同じ外観の建物を、同じ場所に再現したものです。

汐留の新しいシンボルとなった「旧新橋停車場」はレトロな外観を眺めるだけでも楽しめますが、館内の「鉄道歴史展示室」で鉄道や汐留の歴史などに触れる楽しみ方もあります。まだ訪れたことのない方も、ぜひ一度足を運んで、明治時代の息吹を感じてみてください。

▲汐留シオサイトに再現された「旧新橋停車場」（正面）。往時をしのばせる情緒漂う外観です。

▲遺構からの出土品の一部。双頭レール、犬釘、改札鋏など（「旧新橋停車場鉄道歴史展示室」の展示物）。

▲鉄道開通時の新橋側の起点となったポイントを示す「0哩（ゼロマイル）標識」。

旧新橋停車場で鉄道の歴史に触れよう

鉄道歴史展示室

旧新橋停車場の中にあるミュージアム。遺構の解説や鉄道史・昔の汐留に関するデータベース等が公開されているほか、鉄道やアート関連の企画展も随時開催されています。

住所・TEL： 港区東新橋1-5-3
TEL：03-3572-1872

開館時間： 11：00〜18：00
（入館は閉館の15分前まで）

休館日： 月曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）・
年末年始・展示替え期間中

入場料： 無料

最寄り駅: JR・都営浅草線・東京メトロ銀座線・ゆりかもめの新橋駅、都営大江戸線・ゆりかもめの汐留駅

※詳細は下記URLをご参照ください

http://www.ejrcf.or.jp/

Event Information

『鉄道のデザイン～過去から現代・未来へ～』

鉄道に関する「デザイン」に注目した企画展。新幹線の開業期にはじまり、現在と未来のJR東日本の車輌・駅舎デザイン等を紹介します。

開催期間：2007・7／24（火）～11／18（日）
※～7／8（日）は「千代紙いろいろ 小間紙の世界」展を開催。
7／9（月）～7／23（月）は展示入れ替え期間のため休館。

▲かつての新橋駅の様子を物語る出土品の数々。

▲ガラス張りの床から、駅舎の遺構を見ることができます。

◆展示室は明るくて落ち着いた雰囲気。

>> MAP

協力：（財）東日本鉄道文化財団、港区立港郷土資料館　参考文献：「増補 写された港区一 芝地区編」（港区教育委員会）、「日本の鉄道開業」（（財）東日本鉄道文化財団）、「港区史」（港区）

▲このページのトップへ

｜個人情報保護について [PDF]｜

Kissポート財団
(公益財団法人 港区スポーツふれあい文化健康財団)
港区赤坂4-18-13赤坂コミュニティーぷらざ
電話：03-5770-6837/Fax：03-5770-6884
お問い合わせ：fureai-info@kissport.or.jp

Kissポート財団について

JQA-QMA12663
JQA-EM4580

10861140(03)

このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。
当財団の許可なく複製、転載は出来ません。